

# 安永 裕幸

## ジェンダー平等と工業開発

今回は、ジェンダーについて議論することとした。言うまでもなく「ジェンダー平等を実現しよう」はSDGsの5番目の目標であり、既にその全体像については本連載でも国連広報センター・根本かおる所長が分かりやすく書いておられる。私としては、工業開発を推進することにより開発途上の貧困問題を解決する、というミッションを持つ国連工業開発機関(UNIDO)の立場から本件を論じてみたい。ジェンダー平等が日本社

# 未来を 変える

会の大きな課題と認識されるようになったのは、最近のことではないはずだ。私がか社人になった1986年4月には「男女雇用機会

均等法」が施行され、既に35年近くも日本社会は、この課題を少なくとも「自覚」はしてきた。しかしながら、国際的な指標である「Global Gender Gap Report 2020」では日本は121位。産業界を見渡しても、(特に製造業では)偉い人はオジサンばかり、というお寒い現状である。

社会制度としては、クォータ制(役職の一定割合以上を明示的に女性に割り当て、そのような登用を行うこと)の議論もされていて、私個人としてはそれも有効な手段の一つと考えるのだが、何か工業開発と相性の良いアイデアはないものかと考え、せっかくの機会であるSDG「Women Empowerment 100 世界の女性をエンパワーする100の方法」(ベッツィ・トイチユ著 松本裕訳)という本を買って読んでみた。

「目から鱗」とはこのことで、もちろん、既に見聞きしていた事例も多いが、この書籍中の100の

## テクノロジーで女性に力を

事例のうち、何らかの形でテクノロジーが鍵を握っているものが80近く見つかった。世の中は自分のアタマの中よりはるかに進んでいる、というのは本当であり、しかもそれを世界の若者が独自のアイデアで持続可能な事業にしようとしている事例をたくさん発見してうれしくなった。栄養・保健分野の学校給食やワクチン配布等、日本が戦後取り組んできたものも形を変えて幾つか掲載されているし、電力分野ではこれまでに私の連載の中でも触れた充電ビジネスやLED照明の話、水と衛生設備の分野ではUNIDOとしても応援している雨水貯留やトイレの普及等、いろいろな形でテクノロジーが世界の女性のエンパワーメントにもつながることを確認できた。

私としては、現行のテクノロジーに加えて、更に「まだ実現していない将来のテクノロジーを使って、どうジェンダー平等に貢献できるか?」という視点をより強化し、産業界にも浸透させていきたい。例えば

日本政府の支援によりUNIDOが、南スーダンで農業ハリユーチエーンの開発を通じて、国内避難民とその受け入れコミュニティの女性たちに雇用と収入機会を創出するための農産物加工のトレーニングを実施



ば、「水が全く不要で、衛生面でも完璧なトイレ」や、「安価で、着るだけで乳幼児の感染症予防に役立つ衣類」といったものから、果ては「発光(あるいは蓄光)物質を植物体内に埋め込み、昼の太陽光エネルギー

をもとに夜は自発光する、光る街路樹」で夜道も安全」といったソリユーションも是非実現させたいと考えるのである。もちろん、技術以外の課題も大きい。ジェンダー平等を阻んでいる要素は、日本でも比較的最近まで見られた「教育機会」の男女格差であることが大きいのではないかと。となると、社会制度や文化の面からの対応が必要だ。私個人としては、本当にささやかながら、日本人が

## 全ての女性に教育機会を

やすなが・ゆうこう 86年(昭61)東大院工学系研究科修士課程修了、同年通商産業省(現経済産業省)入省。新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)企画調整部総括課長、経産省産業技術環境局研究開発課長、同原子力安全・保安院ガス安全課長、資源エネルギー庁資源・燃料部鉱物資源課長を歴任。13年大臣官房審議官、15年産業技術総合研究所理事・企画本部長などを経て、17年から現職。06年博士(工学)。